

ふるさと

みのおのおいたち

その15

萱野地区(三)



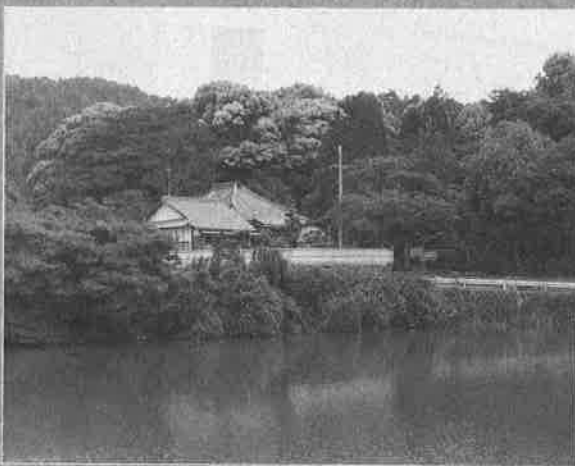
北萱野の白鳥地区(現石丸)にある為那都比古神社は、平安時代の延長五年(九二七)の延喜式『神名帳』に「為那都比古神社二座」と書かれている古い神社です。また、鎌倉時代の正嘉三年(一二五九)

に書かれた勝尾寺文書の中に「当庄(萱野)西東天王」とあるのも同社を指しています。このように、鎌倉時代には天王社と呼ばれ、社殿も東と西に別れていたこの神社は、名前からもわかるように「為



為那都比古神社

上代の萱野地区に新しい時代をもたらし、山麓台地のところどころに定住して地成を開拓しながら村をつくるなど、徐々に今日の礎を築くのに中心的な役割を担ったのは、為那氏族であったに違いありま



旧社跡地

られる西天王社について、江戸時代の天保二年(一八三一)の「白鳥村差出明細帳」に「大婦天王社」また「西御前」と女神名で書かれています。この天王社の神宮寺(本地垂迹説により神社と寺は二つで一

那」と称していた氏族が祖先を祀った「氏神」の社であると考えられます。この為那氏族は古代の大豪族物部氏の系統に属し、箕面地区で阿比太神社を祀った阿比太一族とは同族の關係にあります。

「那」と称していた氏族が祖先を祀った「氏神」の社であると考えられます。この為那氏族は古代の大豪族物部氏の系統に属し、箕面地区で阿比太神社を祀った阿比太一族とは同族の關係にあります。

つと考えられていた)に当たる医王山大宮寺の伝えによると、同社の由来は「背後の山中に屹立している医王岩という巨岩から、大己貴命と少彦名命という土地・生産の神々が誕生」したことによると説

かれています。このように、上古の時代に人々が巨岩也巨末、山頂などの自然から神をつくり出し、やがて人里近くに社殿を設けて、神の常駐を願った事例は数多く知られています。従って、医王岩に生産の神々を誕生させ、後世に社殿を建てて大婦天王を祀ったのは、前に広がる台地を開いて生産に励み、安住して村をつくらせた農民たちでしょう。そのせいか、同社の信仰圏ともいうべき氏子の村々は、北萱野の白鳥、東西の坊島、如意谷の四つでした。一方、比古神を祀った東天王社は、早くから萱野地区全体が氏子であった総社・一の宮でした。ところで、大婦天王社は明治四年の神社合併で、東天王社に合併され、なくなりました。明治政府の「一村一神社」政策によるもので、これにより、従来からの地域と神社の結びつきが絶たれてしまいました。神社をとりまく地域社会が新時代に変わった象徴の一つです。